

研究主題「人権感覚をより一層はぐくむ人権教育の推進

一人権課題を明確にした道徳の時間の指導の在り方」

東京都教職員研修センター研究部研究課
練馬区立光和小学校 教諭 土屋 康子

I 研究のねらい

東京都教育委員会の基本方針1には、『人権尊重の精神』と『社会貢献の精神』の育成」が掲げられており、人権教育の推進は都の重要な教育課題である。各学校では、人権教育の推進を教育目標の基本方針に掲げるなど、その推進に努めているところである。

しかしながら、国の「人権教育・啓発に関する基本計画」及び都の「人権施策推進指針」において指摘されているように、学校における人権教育の現状は、様々な人権課題について「知的理解にとどまり、人権感覚が十分身に付いていないなど指導方法の問題」が課題となっている。今、人権教育を効果的に推進するための具体的な手だての開発が求められている。

本研究では、人権尊重の精神をはじめとする児童の心情に深いかかわりをもつ、道徳教育の充実を図ることで、一人一人の人権感覚が育成できるであろうと考え、次の2点をねらいとして追究することとした。

- 児童に人権感覚の育成を図る、道徳の時間の工夫
- 人権課題を取り上げた教材及び指導方法の開発

II 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 人権教育において「道徳の時間」が果たす役割

道徳の時間は「児童が自己への問い掛けを深める」時間である。自己の内省を深める道徳の時間の目標及び内容は、人権教育を推進する上でも重要であると考え。道徳的価値や人間としてのよりよい生き方についての自覚を深めることが、人権を尊重し、偏見や差別意識を解消しようとする道徳的実践力の育成につながるからである。

(2) 道徳の時間における「人権課題を明確にした指導」の意義

[表1]

人権課題を取り上げた指導は、児童に、人権課題にかかわる様々な問題に気付かせ、驚きや怒り、悲しみや共感などの「心の動き」を引き起こさせると考える。他者の生き方やかかわりを通して感じたことが、自分自身をより深く見つめ直すことにつながり、人権課題にかかわる様々な問題を、自らの生き方の問題としてとらえるきっかけとなる。

*「気付き」をはぐくむ
*「自己への問いかけ」を深める

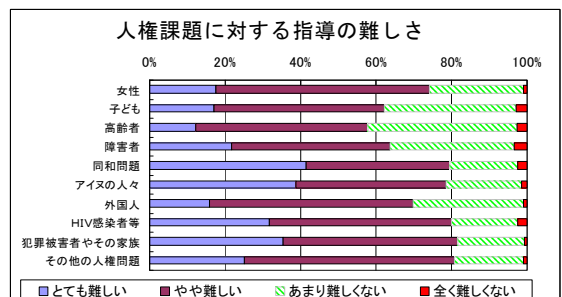
以上、基礎研究から明らかになったことを踏まえ、指導方法の具体化に向け、[表1]の2点に着目することにした。

2 調査研究

人権教育の実態を把握し、授業改善や指導内容の充実等への指針を得る目的で、平成17年8月に、東京都公立小学校教員513名を対象に、調査を実施した。その結果、人権課題に対して約60%以上の教員が指導の難しさを感じていることが分かり、分析から次の2点が明らかになった。

[グラフ1]

* 調査内容の一例



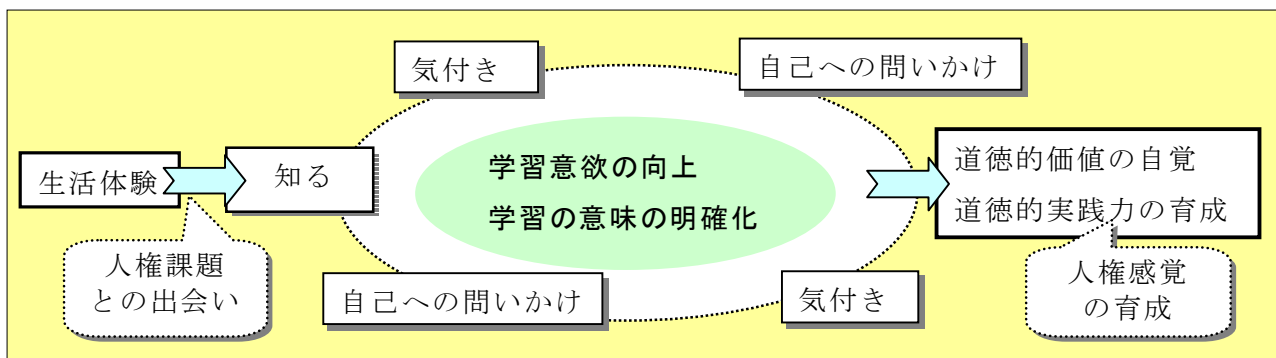
○人権課題を取り上げた新たな教材を作成したり、従来の資料を、人権課題を明確にして見直したりするなど、低・中・高学年の発達段階に即した教材の開発が必要である。

○人権課題を明確にした効果的かつ具体的な指導方法や工夫が求められている。

3 実践研究

「気付き」を生じる感性をはぐくみ、「自己への問い掛け」を深める道徳の時間の学びの流れをまとめると〔図1〕のようになる。人権課題にかかわる問題を「知る」教材及び学習課題は、児童の内発的動機付けを喚起し、学習の意欲を高めるとともに、学習の意味を明確にすることになる。このような学びを積み重ねることで、児童の人権感覚は、はぐくまれていく。

〔図1〕 道徳の時間の学びの流れ



(1) 発達段階に即した教材の開発

児童は生活体験に基づいて気付いたり、自己への問いかけをしたりする。そこで、道徳の時間における教材は、発達段階に即して、実感や共感がもてるようにすることが大切である。さらに、児童の学びの流れを大切にするために、「生活体験」と「気付き」「自己への問いかけ」の間を効果的につなぐ教材の開発や提示の工夫が必要である。

〔表2〕 教材開発の視点及び手だての一例

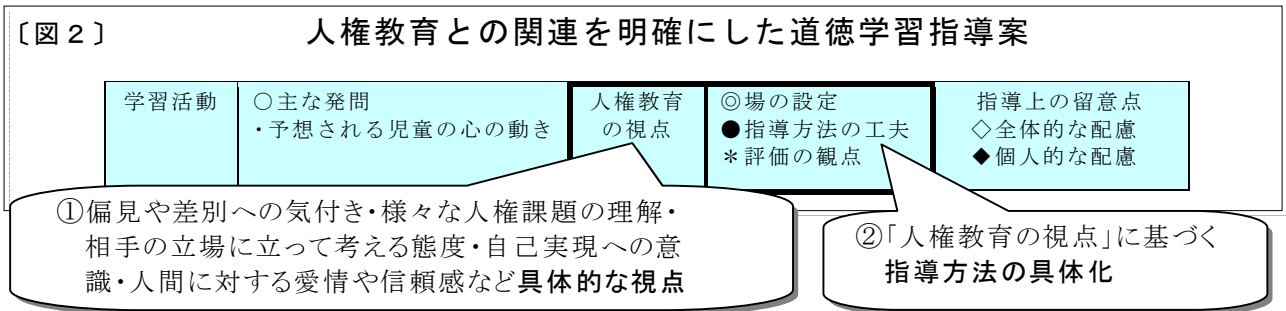
	主な発達の特性	人権教育の指導方法	教材の視点	具体的な手だて(例)
	人権教育の指導方法等の在り方について(第二次とりまとめ案)より			
小学校前期	<ul style="list-style-type: none"> 想像力、言葉による理解力・認識力が育ってくる。 抽象的な思考もできるようになるが、まだ幼児期の特性も残っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活体験に基づく「気付き」から想像力や認識力に訴えて深い理解に導くよう配慮する。 	人権課題にかかわる様々な問題への「気付き」をはぐくむ教材	<p>心情に重点を置き、共感を促す資料</p> <p>*路上生活者の気持ちを語り聞かせ、心の痛みを想像させる。</p>
小学校後期	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の数も増え、概念を理解し、抽象的な思考が深まっていく。 認識力、分析力、批判力等も身に付くようになり、自意識も次第に強くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 人権の意義や重要性を知的に理解させることができる。 知的理解が抽象的なものに留まらないよう体験的学習を併用して、具体的人権問題を直感的に「おかしい」と認知する感性の育成を図る。 	人権課題について正しい理解を深められる教材	<p>事実を提示し、正しい理解を促す教材</p> <p>*路上生活者の現状をグラフ等で示し、偏った見方等がないか認識させる。</p>

(2) 人権教育との関連を明確にした指導案の作成

右の〔図2〕に示すように、次の点を明らかにして指導案を作成することにした。

①道徳の時間のねらい及び学習活動と先行研究（東京都教職員研修センター紀要第3号）に示されている「人権教育の視点」との関連

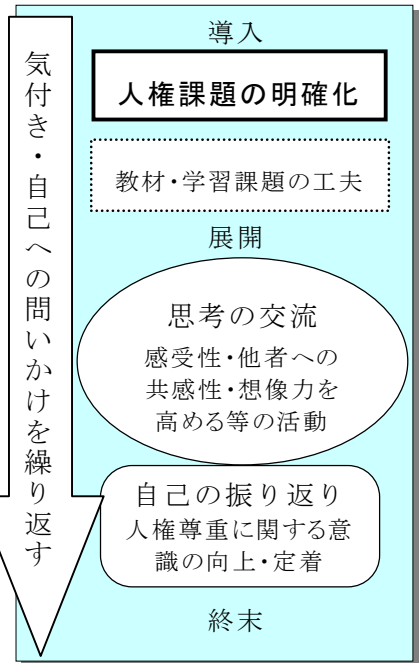
②「人権教育の視点」に基づく手だて(◎場の設定 ●指導方法の工夫 *評価の観点の具体化)



(3) 人権教育のねらいを踏まえた指導過程の工夫

道徳の時間において、人権教育の視点に基づく活動を明確化するためには、まず、導入における工夫が大切である。また、〔図3〕で示すように、児童に人権課題を自分の生活とかけ離れた問題と感じさせないように教材や学習課題を準備する。その際、例えば高学年では、予め予告した人権課題について一人一人が調べた上で、自分なりの考えをもって学習に臨ませる工夫も考えられる。展開においては、友達と考えや意見を交流させ、他者への共感や想像力を高めるなど、多様な活動を通して気付きや自己への問いかけを繰り返させる。こうした学びによって児童は、人権教育の視点から自分自身を振り返り、深く見つめ直し、道徳的価値の自覚を深めることができると考える。同時に人権課題にかかわる様々な問題を自らの生き方の問題としてとらえることができる。

〔図3〕 指導過程



Ⅲ 研究の結果と考察

1 検証授業の実施

〔表3〕 検証授業における指導の工夫(例)

人権課題	対象学年 ・内容項目	学習課題 ・主題名等	指導の工夫(例) ◆「気付き」をはぐくむ ○「自己への問いかけ」を深める
子ども・高齢者・障害者	低・1-(3)勇気	ゆうきのとびら	○スキル学習
障害者	低・3-(2)生命尊重	いのちをありがとう	◆導入○心に残った言葉カード
	中・3-(2)生命尊重	いのちの記念日	○振り返りの発問・ワークシート交換
	中・4-(3)家族愛	家族の心のつながり	○役割演技
	高・4-(5)家族愛	家族の絆	○グループ学習・役割交代
外国人	高・1-(6)個性尊重	ソーサワサワ (人間の価値はみな同じ)	◆課題の意識化 (ビデオ・タンザニア語の意味)
HIV感染者等	高・3-(2)生命尊重	かけがえのない生命	◆人権課題についての事前学習
その他の人権問題 路上生活者	低・2-(2)思いやり	あいてのきもち	◆教材(ビデオ・ペープサート)
	中・2-(2)思いやり	相手のいたみを感じる心	◆資料の語り聞かせ(Q&A方式)
	高・2-(2)思いやり	相手の痛みを感じる温かい心	◆現状を具体的に伝える教材

〔表3〕の中から、人権課題「その他の人権問題(路上生活者)」を取り上げて実施した検証授業に焦点を当てて、考察する。

☆「気付き」をはぐくみ「自己への問いかけ」を深める工夫 ○検証できた有効な手だて

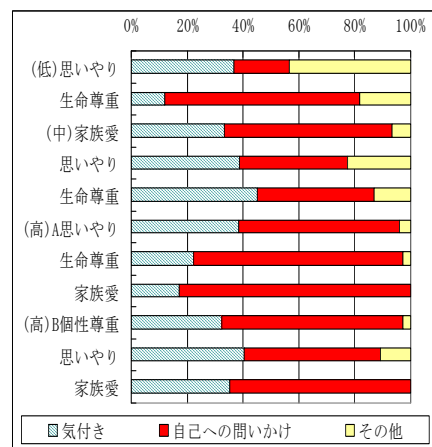
<p>《低学年》 ☆路上生活者の気持ちを想像できるように、アニメーションビデオ「ぼくだってきれいにしたいんだ」(人権教育資料センター所蔵)を視聴させ、主人公の心情に共感させる。その後【資料1】をペーパサトで伝える。</p>	<p>○「路上生活者」の気持ちをより理解できるように、身近な問題を扱ったビデオの活用</p>
<p>《中学年》 ☆【資料1】を一方向的に語り聞かせるのではなく、児童とQ&A方式でやり取りしながら、分かりやすく語り伝える。</p>	<p>○3年生には心情を中心に、4年生には正しい知識を盛り込んで伝える Q&A 方式</p>
<p>《高学年》 ☆児童に、次時で取り上げる人権課題を知らせ、事前に「路上生活者」について調べたり、考えさせたりしておく。</p>	<p>○人権課題について考える時間の確保と事前学習の習慣</p>
<p>☆教材として、新聞記事や「ホームレスの自立支援等に関する東京都実施計画」(平成16年7月)の文章を図やグラフで提示する。</p>	<p>○事実を客観的にとらえられる教材の提示</p>

2 児童の変容

各学年で、「人権にかかわる問題に前向きにかかわっていく意欲」に関する質問をしたところ、授業後には児童全般に明らかな向上が見られた。

右の[グラフ2]は、授業において記入した490名分のワークシートの記述を、表現に着目して「気付き」「自己への問いかけ」「その他」に分類した結果である。内容項目や取り上げた人権課題によって、分布にやや違いが現れた。さらに、一人一人の記録を詳細に分析してみると、授業を重ねるに従って、児童には、人権課題にかかわる様々な問題に気付き、広い視野に立って考えようとする変容が見られた。

[グラフ2] 記述の表現分析



人権課題について主体的に考えようとする意欲の向上は、いずれの学年においても顕著であり、発達段階により以下のような特徴を挙げる事ができた。

- ・低学年児童の心に残った言葉は、「相手の立場に立つ」大切さの視点でまとめられる。
- ・中学年児童の感想は、「人権課題にかかわる問題への気付き」「不十分な自分の自覚」「生きる喜び」の3つに大きく分類できる。
- ・高学年児童の感想は、中学年の3視点に加えて、「偏見や差別意識の解消への意欲」「よりよい社会づくり」の視点で分類できる。

高学年児童の記述には、身の回りにある偏見や差別意識の解消に、自分からかかわろうとする前向きな意欲の芽生えが感じられた。

全体的には「人間に対する愛情」を強く意識した記述の傾向が見られ、人権感覚の育成については発達段階を踏まえ、意図的・計画的な指導を行うことが重要であることを痛感した。

IV 今後の課題

- 人権教育の機会の一層の拡大が図られるように、さらに人権課題を明確にした道徳の時間の教材及び指導方法の開発を継続すること。
- 人権課題を明確にした道徳の時間について年間計画を整備し、教員間の共通理解を図り、学校として人権教育の一層の推進を図ること。